教育実践部門

コミュニケーションの目的を達成するために、相手意識をもって話す児童の育成
～類似の言語活動と評価基準の共同組み立てを取り入れた外国語の実践～

村上市立村上南小学校　大滝　裕（平成 21 年度）

Ⅰ　実践テーマについて

村上・岩船地域で採用されている「NEW HORIZON Elementary」では、Unit ごとにゴールとなる言語活動(Our Goal)が設定されており、そこに向けて「Starting Out」(場面との出会い)→「Your Turn」(表現への慣れ親しみ)→「Enjoy communication」(ゴールとなる言語活動)という単元構成になっている。教科書の単元構成通りに学習を進めると、中学年に比べて言語材料が多くなったことで、より自分の考えや気持ちを言語活動で相手に伝えることができた児童がいた。一方で、言語材料を覚えることに意識が集中してしまう児童も多くいた。それらの児童は、ゴールとなる言語活動で表現を思い出して話すことばかりに意識が向き、相手意識のあるコミュニケーションができず、次の単元でも同様な姿が見られた。

学習指導要領では、見方・考え方を働かせ、外国語による言語活動を通して資質・能力を育成することが求められている。しかし、やみくもに言語活動を繰り返すだけでは、言語活動の質は上がらず、相手意識のあるコミュニケーションを行うことはできない。

このようなことから、コミュニケーションの目的を達成するために相手意識をもって話すことができるよう、言語活動の設定の仕方を工夫した単元を構想し、本実践を行った。

Ⅱ　授業の実際１

１　手立て

(1) ゴールとなる言語活動と状況が異なる言語活動(以下、類似の言語活動)を取り入れた単元構成

単元のゴールとは異なる相手と行う類似の言語活動を単元の中で複数回行う。このことにより、言語材料に慣れ親しんだり、コミュニケーションの目的や場面、状況への理解を深めたりしながら言語活動を行う姿が期待できる。

(2) 評価基準の共同組み立て

単元の導入の際、目的や場面、状況を設定する中で、評価基準を設定する。その際、教師が一方的に示すのではなく、コミュニケーションの目的を踏まえてどのような評価基準にするとよいのかを児童と共に考える。このことにより、目的が明確となり、相手意識をもってやり取りする姿が期待できる。

Ⅲ　授業の実際１

１　授業の実際　Unit３「Let’s go to Italy.」(令和５年７月村上南小６年生 23 名)

(1) 単元のゴールと目指す姿への見通しをもつＡ児とＢ児

本実践では、英語への苦手意識があるＡ児とコミュニケーションに対して消極的なＢ児が、目的を達成するために相手意識をもってコミュニケーションができることを期待して実践を行った。

Starting Out で、旅行代理店の店員が世界の様々な建物や食べ物を紹介したり、おすすめの国を紹介し合う児童の動画を視聴したりした児童に、ＡＬＴへおすすめの国を紹介することを提案した。次に、紹介を通して相手にどのようになってほしいかという目的について尋ねると、「カヤ先生(ＡＬＴ)に紹介した国に興味をもってもらいたい。」という発言があった。多くの児童が賛同したので、単元のゴール「旅行代理店の店員になっておすすめの国を紹介し、興味をもってもらおう」を設定した。

次に、Can-Do リストから Unit５に該当する項目を確認すると、「おすすめの国について、伝えようとする内容を整理した上で、理由を明らかにしながら話すことができる。」とあったことから、「おすすめの国のよさが相手に伝わるような紹介をすることができる。」という評価基準を設定した。さらに、それに加えて具体的にどのような評価基準があるとよいか尋ねると、「相手に伝える工夫を入れるといいんじゃないかな。」という発言があり、その他の児童が「AAA は一つの工夫じゃなくて、二つ入

れるといいんじゃない？」「やっぱり、相手とやり取りしながらだとおすすめの理由がよく伝わるから、AAA は必ずやり取り(質問)を入れることにしよう。」と続けた。そのようなやり取りを通して設定した評価基準は、以下の通りである。どの段階を目指すか尋ねるとＡ児は AA、Ｂ児は A に挙手した。

AAA	AA	A
(Aに加えて) 相手に伝えるための工夫を複数取り入れて紹介ができる。(やり取りを必ず)	**(Aに加えて) 相手に伝えるための工夫を一つ取り入れて紹介ができる。**	**おすすめの国のよさが相手に伝わるような紹介をすることができる。**

(2) 同じ学級の仲間におすすめの国を紹介するＡ児とＢ児(類似の言語活動①)

単元のゴールに向けておすすめの国を決め、その国について調べたことをスライドにまとめる作業を進めた児童に、類似の言語活動①(同じ学級の児童が相手)を設定した。まず、ペアで発表の練習をする時間をとると、まだ十分に音声に慣れ親しんでいない状況が見られたので、デジタル教科書で音声を確認したり、動画で自分の発表を見返したりする場を設けた。その後、前時にランダムで決めた学級の仲間に、おすすめの国について発表する活動を組織した。Ａ児、Ｂ児は以下のように発表を行った。

Ａ児	Ｂ児
Hello. Brazil is a nice country. You can drink guarana. You can watch soccer game. Thank you.	(無言)

発表後、Ｂ児に発表ができなかった理由を尋ねると、「スライドで作成した英語や調べた食べ物の言い方がよくわからなかったから。」と答えた。振り返りの時間に、評価基準のどの段階を目指すのかを振り返りシートにチェックするよう伝えると、Ａ児は AAA、Ｂ児は A に印をつけた。

(3) 隣の学級の担任におすすめの国を紹介するＡ児とＢ児(類似の言語活動②)

おすすめの国の紹介を経験した子どもたちに、類似の言語活動②(隣の学級担任が相手)を組織した。二人の児童が実際に行った発表と振り返りの記述は以下の通りである。

Ａ児（→は相手の返答）	Ｂ児
Welcome to our shop! Brazil is a nice country. You can drink guarana（ガラナ）. It’s delicious. (飲むジェスチャー　※図１) You can watch soccer game. Do you like soccer?　→　Yes, I do. Me, too. Do you(want to)go to Brazil? →　Yes, I do. Thank you for listening. **図１　ジェスチャーを交えて紹介するＡ児**	Hello. Welcome to our shop. Peru is a nice country. You can buy poncho. You can eat lomo saltado(ロモ・サルタード). You can see Machu Picchu(マチュピチュ). Do you like Machu Picchu? →　Yes! （顔をあげて相手を見る　※図２） Thank you for listening. (笑顔で thumbs up のジャスチャー) **図２　相手を見ながら質問するＢ児**
振り返りの記述	
今日は、めあてやゴールに向けて、鴻島先生(隣の学級担任)に紹介をしました。ぼくが今日気を付けたことは、テンションと自分が取り入れた工夫に気を付けて紹介しました。AAA にいけるようにがんばります。	今日は、鴻島先生にスピーチをしました。前に困った名前も分かるようになって、やり取りもできました。このまま AAA になれるように、工夫を複数取り入れてやりたいです。

(4) 実践を振り返って

Ａ児は、児童と共同で設定した評価基準を意識しながら類似の言語活動を行うことを通して、言語材料に慣れ親しむとともに、相手に興味をもったもらうための工夫を取り入れながら発表することができた。Ｂ児は類似の言語活動②において、相手の目を見ながら質問を入れて発表することできた。振り返りには、さらに評価基準の上の段階を目指したいという意欲が感じられる記述があり、Ｂ児の変化を見取ることができた。

一方で、Ｂ児は言語活動①において、コミュニケーションを図ることができなかった。言語材料への

慣れ親しみが不十分であったことや評価基準の具体的な姿をイメージでいていなかったことが原因であると考えられる。児童の様子を見取った上で、類似の言語活動や評価基準の組み立てを行う必要があると考えた。

Ⅳ　授業の実際２

１　手立て

⑶ 児童の学びの状況を見取って設定する類似の言語活動①と評価基準の共同組み立て

児童が言語材料に慣れ親しんでいる状況を見取り、類似の言語活動①を組織する。慣れ親しんでいる状況は、Chant の観察と教科書付属の Google Forms によるリスニングテストの結果を活用する。このことにより、多くの児童が言語活動①においてやり取りができるようにする。さらに、体験的にゴールとなるやり取りへの見通しをもった状態で評価基準の共同組み立てを行うことにより、より具体的な姿をイメージすることができ、類似の言語活動②やゴールとなる言語活動において、相手意識をもってコミュニケーションを図る姿が期待できる。

２　授業の実際 Unit３「Can you play dodgeball?」（令和６年７月村上南小５年生 21 名）

⑴ 単元のゴールと目指す姿への見通しをもつＣ児（１／８時間目）

本実践では、外国語の授業への意欲は高いものの言語材料を思い出すことに意識が集中してしまうＣ児がコミュニケーションの目的を達成するために、相手意識をもってやり取りすることができることを期待して実践を行った。

Unit２でＡＬＴとやり取りして分かったことをもとにして作ったバースデーカードを送る活動を行った子どもたち。「カヤ先生のことはよく分かった？」と尋ねると、「まだ分からないことがある。」と答えた児童がいた。Unit３の Can-Do が「できることを伝え合うことができる」だったことから、お互いのことをよく知るために、「できること図鑑」を作ってプレゼントしてはどうかと提案すると、Ｃ児を含めて多くの児童が賛同したので、単元のゴール「『できること図鑑』をプレゼントして、お互いのことをもっと知ろう」を設定した。

⑵ 児童の学習の様子を見取って組織する言語活動①（４／８時間目）

学級の多くの児童が Chant で「できること」についての英語表現を言えるようになり、教科書付属のリスニングテスト(Google Forms)を実施したところ、学級の平均スコアが８割を超えたことから、多くの児童が言語材料に慣れ親しんでいると判断し、類似の言語活動①を設定した。Ｃ児は、隣の児童に「I can play badminton. I can play basketball.」と伝えた。その他の児童も、“I can ～.”の表現を使って、お互いにできることを伝え合った。Ｃ児は、振り返りに次のように記述した。「私は、can を言えるようになりました。そして、ゴールに近づくことができました。次は、答えることを頑張りたいです。そして、また次のステップに進みたいです。」

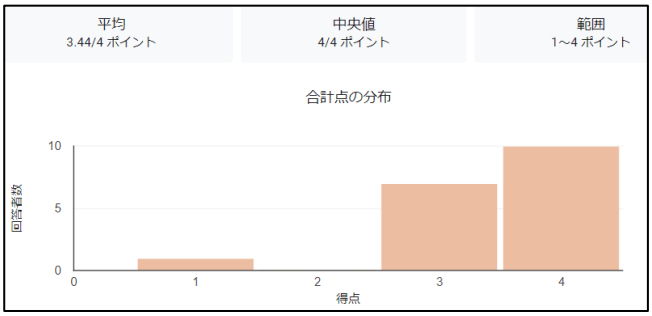

図３ Google Forms によるテスト結果

⑶ 評価基準の協同組み立てを通して見通しをもつＣ児（５／８時間目）

やり取りを実際に行い、体験的に理解した子どもたちに、評価基準の協同組み立てを行う場を設定した。CAN-DO に「できることについて伝え合うことができる」とあったことから、A の姿は「できることを伝える」とし、AA と AAA の姿について児童と考えることにした。まず、目的を達成するために AA はどのような姿を目指すとよいかについて考える時間をとると、ある班から「できることを一つだけでなく増やして伝える。」という意見が出た。この意見に多くの児童が賛成した。次に、AAA の姿について考えると、どの班からも意見が出なかったため、再度班ごとに話し合う時間をとることにした。すると、「相手に尋ねる」「できないことを伝える」「くわしく説明する」といった意見が出された。この中から目的に合っているものを選ぼうと考えたが、それぞれの意見についてよいと考える児

童がいたため、それらの中から自分が選んだものを取り入れることとした。どの段階を目指すかを尋ねると、C児はAAAに手を挙げた。

	AAA	AA	A
内容	(AAに加えて)いずれか取り入れる ①質問をする ②できないことも伝える。 ③くわしく言う。	(Aに加えて) できることを複数伝えることができる。	「できること」を伝え合うことができる。

(4) お互いのことを知るために、担任やＡＬＴとやり取りするＣ児

類似の言語活動①や評価基準の共同組み立てを行って見通しをもったＣ児が実際にやり取りを行った様子は以下の通りである。

① 類似の言語活動②(相手が担任　７／８時間目)

Ｃ児	担任
Hello! I can play badminton well. My birthday is August 3rd When is your birthday? Thank you.	 Hello! My birthday is June 25th.

図４ 担任とやり取りするＣ児

② ゴールとなる言語活動(相手がALT　８／８時間目)

Ｃ児　※下線部は、前時からの追加点	担任
Hello! I can play badminton well. <u>I like cucumber.</u> My birthday is August 3rd. When is your birthday? <u>I like snoopy.</u> Thank you.	 Hello! Oh! I see. My birthday is February 1st. Oh! Snoopy. Thank you.

図５ ＡＬＴとやり取りをするＣ児

(5) 実践を振り返って

ゴールとなるＡＬＴとの言語活動において、Ｃ児は自分のことをより相手に知ってもらうために、類似の言語活動②の内容に加え、自分の好きな食べ物やキャラクターの内容を付け加えた。また、類似の言語活動においては、メモを見る時間が多くあったが、ＡＬＴの顔を見ながら自分のことを伝えようとする姿が見られた。

Ⅵ　実践を終えて

抽出児の学びの様子から、目的を達成した具体的な姿を評価基準として児童と作成し、やり取りの見通しをもった中で複数回の類似の言語活動を設定することで、相手意識をもって内容を付け加えたり相手に伝える工夫を取り入れたりすることができると分かった。その際、機械的に言語活動を設定するのではなく、児童の慣れ親しみの様子を見取って言語活動を組織するという見取りとタイミングの重要性も見えてきた。一方で、評価基準の作成については、児童が自力で適切な基準を考えることは難しい様子が見られた。評価基準について考える前に、モデルを提示してから話合いを行うなど、教師の働きかけが必要であることが考えられる。より目的と合致した評価基準となるよう、児童と教師がどのように共同で評価基準を組み立てていくとよいのか、その方法について考え実践していきたい。

〈参考文献〉

・新潟県教育庁義務教育課「児童の資質・能力を育む実践事例と授業改善のポイント(小学校外国語活動・外国語編)」2022.3
・文部科学省「初等教育資料令和２年２月号」東洋館出版 2020.2
・文部科学省「初等教育資料令和６年５月号」東洋館出版 2024.5
・英語教育出版部「英語教育 2019 年７月号 Vol.68」大修館書店 2019.7